

信州上田学 長野大学が成果発表

- 野倉別所地区「里山絵図」
- 舌喰池水鳥観察会「いきもの看板」

上田市と連携し19年より信州上田学事業を進める長野大学では、同事業のひとつ「地域連携パートナー事業」の成果として野倉別所地区「里山絵図」と舌喰池水鳥観察会「いきもの看板」を先ごろ発表しました。

同大地域づくり総合センターと信州上田里山文化推進協議会は、野倉・別所温泉上手地区で今年度から3年間、里山文化を伝承し若者が農地や森林など地域資源を活用できる環境を整備する「アグロフォレスト・プロジェクト」に取り組んでいます。環境ツーリズム学部の子田睦美教授と3学部29人の学生が住民らと連携して里山の魅力について



調べ、ワラビ・マコモ・エゴマなどの畑の整備に参加、竹林整備や竹炭作りなども体験しています。

絵図作成はこの一環で、「次世代がつくる里山の魅力絵図」としてまとめられたもの。雨乞い信仰の夫神岳や氷室、夫婦道祖神、寺子屋だった建物を利用した民俗資料館、日本遺産に関係する別所神社、北向観音など14カ所を絵図に掲載して紹介。1000部作り、公民館などに置く予定です。

また環境ツーリズム学部の里山再生ゼミでは、16年から6年間にわたる調査・研究を行っており、今回制作した舌喰池水鳥観察会「いきもの看板(縦1m×横2m)」は、水鳥の種類や生態、ため池の保存・利用などを写真や絵とともに紹介しています。可動式の看板は現地での水鳥観察会や講習会など、屋外・屋内のさまざまな機会に活用していく計画です。

「二次的な自然でもあるため池は、生物多様性の保全に大きな役割を果たしている」と、同ゼミの高橋一成教授。4人の学生が年間を通じてため池の水位や植生水鳥の種類や数などの観察を続けており、3年間にわたり観察してきた大和田樹里さん(4年)は「塩田平のため池は種類も数も多いと思う」と話していました。

